

## 6回 環境問題の格差／国や地域による著しい環境問題の格差を知り、考える。

### 南北問題について

1960年以降顕著となった北半球の先進国と南半球の発展途上国との間の諸問題のことである。拡大する経済格差の是正が中心課題だが、それを通じて新興独立国の結束が強まり、国際政治の面では両者の緊張が問題となっている。

市場は環境を守れない、社会を統合できない

市場システムの問題について

るいネット 参照

人口比では世界の15.7%にすぎない先進国が世界のGNPの78.5%を独占している(1991年)というデータがあります。一方、エネルギー消費という観点では、一人当りに換算してアメリカはインドの29倍、日本は約13倍ものエネルギーを使っている(1995年)というデータがあります。

単純化して、GNPを独占している6分の1の人口(約10億)を、エネルギーを他の20~30倍大量消費している先進国の人間と考えると、世界のエネルギー消費量のうち80~85%を先進国の人間が占めていることになります。さらに単純にこれを平均化すると、今の先進国のエネルギー消費量を1/6にすれば、現在の世界中の人間のエネルギー消費量が均一になります。

では、世界市場をさらに拡大させることによって、6分の5を占める非先進国、とりわけ5分の1以上を占める、日常の生活のニーズ(衣食住・教育・医療など)を充たせないほどの「貧困」層の生活を底上げすることができるのでしょうか。

これについては3つの限界が立ちはだかると考えます。1つは市場システムそのものの問題、そして地球環境破壊の問題、さらに市場拡大の限界の問題です。

南北問題の起源は現在の先進国による植民地支配の時代に遡ります。イギリスを始めとする列強国は、植民地の安価な原料やマンパワーを利用して世界で確たる地位を築いてきました。その延長線上で戦後取られてきた途上国の開発プロジェクトでも、途上国のGNP拡大こそ実現したものの、全て先進国との経済格差を広げる結果となっています。つまり、現在の市場システムとは、やはり本質的にはその参加者の経済格差をつくる事によって富裕層(と貧困層)を生み出す機構から脱却していないのです。

中村尚司氏は「貧困とは自分ではどうしようもない外的な力によって、経済的に従属されている社会関係」と述べています。第三世界の人々が貧困から抜け出せない大きな原因の1つは、**先進国の主導する市場経済に組み込まれていることにあるのです。**

先進国がさらに市場拡大を続ければ、南北間や途上国内での貧富の差もおそらく広がるでしょう。しかも、戦後のようなよほどの市場拡大が無い限り、途上国も含めて全体の生活水準の底上げが図られる

可能性は薄いと考えます。そして、先進国の市場の先行きについては、環境限界やここで議論されているような先進国バブルの状況から考えて、拡大など望めないばかりか、このまま持つかどうかさえ極めて怪しいものだと思います。

この経済格差こそが、環境破壊を推し進めているのだと思います。この事実に目を塞ぎ、環境問題だけを取り出しても一向に解決しません。**環境問題の背後には、市場システム統合があり市場化による私権獲得が自国の発展のみならず、他民族や他集団の存続をも脅かすと言った略奪性の問題にあります。ある意味、先進国の発展は、環境破壊と途上国の犠牲の上に成り立っているのです。**

問題は、「周りを犠牲にしてまでも自国の発展に固執しなければいけないのか。」と言う問題です。

市場化絶対である以上全く変わりません。なぜなら、市場システム化とは、自由な私権追求に他ならず、己の自由は、周りの犠牲の上に成り立っているからです。そして自由な私権追求の前では、周りのこと途上国のことなど関係ないからです。

世間では、グローバル経済と騒いでいますが、騒いでいるのは先進国だけです。これは、先進国における、経済格差を生み出す為の一方的な押し付けであり、常に勝者序列による経済維持の何物でもありません。グローバル化を言うのであるなら、一方的な押し付けでなく途上国や相手国の生活習慣や文化或いは生活環境を事実と認めた上で、地球全体としてどう取り組むべきかの視点が不可欠だと思います。

環境破壊 — 「温暖化防止」を取り巻く問題 —

「温暖化防止」とは「如何にCO<sub>2</sub>を排出しないか」ということであり、それは「市場縮小が嫌なら、効率的に化石燃料を燃やす方法を開発するか、代替エネルギーを開発せよ。できなければ、排出権を売れ」ということである。そこには「温暖化防止」をお題目に、産油国を含む途上国に対して序列格差を維持しようとする、ヨーロッパを中心とした先進諸国（非産油国）の企みがある。

「CO<sub>2</sub>の排出権」とは、たとえ市場が縮小しても（=燃料消費が減っても）排出権を売って市場縮小を先送りすることができる仕組みで、実際にロシアは成長率が予想を下回ったため、京都議定書を批准し、排出権売却による収入を得ようとしたとされる。

結局「温暖化防止」とは、人類を取り巻く環境をどうするか、という本質的な統合問題を捨象したまま、市場拡大が停止して格差の旨味が縮小し、国家間の序列闘争にも、国内の市場拡大にも突破口が無くなったがゆえに編み出された方便であり、目先収束の賜物である。決して「環境」の問題ではない。

そのような閉塞した状況が、「温暖化防止」をはじめとした様々な「環境問題」を分かりにくくさせているし、決して根本原因の追究には向かわない構造を作りあげている。

国家間の序列闘争をどう抑制するか、人類を取り巻く環境をどう回復するか、そして私権に代わる活力をどう再生するか、それらすべてに対して答えを出さない限り、「温暖化防止」という問題は解決されることもないだろう。

## 環境問題をめぐる3つの対立軸

慶應義塾大学教授 黒川行治

私の研究課題の一つに「排出量取引の会計測定」がある。このテーマは、(財)地球産業文化研究所が2000年度に設置した「排出削減における会計および認定問題研究委員会」に、委員長であった公認会計士の(故)井上壽枝先生から議論に参加するようにお誘いを受けたことに始まる。当時、日本と中国政府の合意による「アジア経済構造改革等支援」事業の9つのプロジェクトが、北京の清華大学と慶應義塾大学をプラットフォームとして進行しており、私は「中国企業管理研究」プロジェクトの主査として、中国に環境会計実践の種を蒔くことを目標に、委員の井上壽枝先生とともに、上海電力等に環境会計の理論を紹介し、実践を促す努力を一緒にして意気投合したのである。上海電力では、12基ある石炭発電所で、脱硫装置を付けている発電設備は皆無であった。

温室効果ガス削減を含む地球環境保全問題は、さまざまな対立を含んでいることから人間の英知が試されている。第1は、**地域間の対立**である。先進国と途上国の地球環境資源を巡る配分の対立であり、国際間の南北格差問題や国内の都市と地方との格差問題と軌を一にしている。中国での環境会計普及活動では、中国の人々から「19世紀以降とくに20世紀に先進国が環境資源の恵みを受たのであるから、21世紀は途上国がその恵みを受た権利がある」とする反論がなされた。それに対して、「先進国は環境に関する科学や社会的価値観の未発達から対応を誤ったのであり、人類として同じ過ちをしないで欲しい」と懇請するのが常であった。これは、現在でも変わっていない。

第2は、**世代間の対立**である。現在の世代が自己の効用を増大させるために地球環境資源をどれだけ消費し、どれだけを後世の世代に残しておくかの問題である。後世の世代として何世代を想定するかを考え出すと悲観的になる。日本では奈良や京都を中心に、いたるところに1000年以上前から続く寺院等が現存しており、それらに身近に接することで、日本文化の継承、先祖からの血統の継承を確認しており、それを外挿して1000年以上の子孫の存続に疑問をもつことは少ないのではないかと。しかし、地球温暖化の予想は高々100年後までしか行われていない。しかもこのままの経済成長、エネルギー消費が続くと、100年先の人類への温暖化の影響は甚大である。

世代間の対立は、1000年を超えるタームを念頭におくと、個体としての人間の幸福と種の継承・繁栄という人類の存在の対立となる。1000年以上も未来を想像することは難しい。私は映画が好きなので、SF映画で描かれる未来を参考に想像することが多いが悲観的になる。「銀河鉄道999」は、個としての永遠の命を求め部分ごとに臓器を機械化していく機械人間の世界が、果たして幸せなのか否かが主題の一つである。「マトリックス」では、人類は実物世界では生活せず、脳に直結するコンピュータの中のバーチャル世界で個としての生活体験を認識している。

第3は、**文明に対する価値観の対立**である。物質的豊かさとそれを効率的に社会全体に普及するシステムの構築が普遍的な文明の進歩とする価値観と、アーミッシュのように近代的発明品を用いず、精神世界の豊かさに価値を見いだすものもある。また、短絡的な解釈だが、個体のもつ価値観の総体である文化の多様な発展、価値観の多様性こそ世界全体の安定にとって重要と考える「文化相対主義」と、物

質文明の豊さを主として前提に、文化の発展段階には普遍性があるとする「文化普遍主義」の対立がある。文化普遍主義は科学の進歩、人類の未来を楽観的に考える傾向があり、また世界の単一化、標準化を目指すものとも言えよう。

地球の半径は 6378 キロメートル、人類を含む生物はその表面 10 キロメートル、地球の薄皮に生息している。地球の寿命や変遷を思えば、人類の危機と思える 100 年の大気の成分変化や化石燃料の埋蔵量減少は、存在するものとしての地球にとっては瞬きの中で生じることであり、死活問題ではない。コスモス（調和する存在としての宇宙）を想い、それを仮に「神」という人間の言葉で表現するならば、地球表面上のパラサイトが大騒ぎをしつつ、解決できないでいるのを「神」は俯瞰していることであろう。

「2001 年宇宙の旅」における神と人類との交わりを思うと、「精神世界で生きることとは何か」について考える時間を、僅かでも増やすことから始めることにしたい。